

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20320114

研究課題名(和文) 中国社会へのモンゴル帝国による重層的支配の研究  
元朝史料学の新展開をめざして研究課題名(英文) A study on the multilayer rule by Mongol Empire to the China society  
The new development of historical materials studies for the Yuan dynasty

研究代表者

村岡 倫(MURAOKA HITOSHI)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：30288633

研究成果の概要(和文)：本科研のメンバーは、期間中に中国各地に出張し、石刻史料を中心に現地調査を行ない、これらの史料によって、個別に、あるいは共同で研究を進め、元朝の中国支配の新たな諸相が明らかとなり、十分な成果が得られた。研究成果と新出史料の情報公開のため、7冊のニューズレターを発行しているが、さらに、奈良大学図書館リポジトリで、その成果をWeb上で近く公開する予定であり、現在準備を進めている。

研究成果の概要(英文)：Members of this study plan went to many districts in China during period this study, and performed a field work mainly on an epitaph. We pushed forward a study by these historical materials individually or jointly. We clarified a method of the rule by the Yuan dynasty in China newly and our study got enough result. For results of research and the information disclosure of new appearance historical materials, we publish seven newsletters. Furthermore, in Nara University library repository, we are going to show the result on Web and push forward preparations now.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	8,000,000	2,400,000	10,400,000
2009年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2010年度	2,300,000	690,000	2,990,000
総計	15,200,000	4,560,000	19,760,000

研究代表者の専門分野：モンゴル時代史

科研費の分科・細目：史学 東洋史

キーワード：モンゴル帝国・元朝・石刻史料

## 1. 研究開始当初の背景

(1) モンゴル帝国＝元朝は、様々な人種・社会・宗教・文化を併存させた多民族・多言

語の複合国家であった。元朝においては、常識化していた「モンゴル人第一主義」、あるいは「漢人は冷遇された」、「漢文化を破壊

した」というような認識が誤りであることが、近年の研究で明らかとなり、元朝の中国支配の研究は、新しい局面を迎えている。モンゴル帝国は圧政だけで領域内の人々を支配したのではなく、多民族・多言語、さらに様々な風俗・習慣・文化、そして宗教などを持つ人々をかかえ、それらの人々を重層的に支配する「多元国家」として機能していたという視点は、徐々に学界に浸透しつつある。

(2) このような研究状況の新展開をもたらしたものは、既存の諸分野の漢籍あるいは各種の版経・写経の史料学的再検討であり、また、中国やモンゴルにおける石刻史料、中央アジア諸言語の文書史料などの新発見であった。

本研究の代表者や分担者は、既存資料の読み直し、新史料の紹介など、元朝史料研究の最前線で活動してきた。各地で、石刻、あるいは文書、典籍などの調査を行ない、その成果である新史料の紹介は、元朝史研究の新たな方向を生み出す力となった。

(3) モンゴル帝国はいかにして、中国において国家運営をなし、多様な人々を共存させ、支配していったのか。この問題は歴史学上の重要な課題であるとともに、グローバル化の進む現代社会においても、今日的な課題である。代表者は、本研究のメンバーがこれまでに培ってきた研究蓄積をもとに、石刻史料をはじめとする新出史料はもちろん、既存の編纂史料なども含め、広範囲かつ多言語にわたる史料の分析を通じて、中国社会におけるモンゴル帝国の重層的支配のあり方を解明したいと考え、今回の共同研究を組織するに至った。

## 2. 研究の目的

(1) 中心的な研究課題は、モンゴル帝国＝元朝が、どのように中国社会を統治していっ

たかの解明である。元朝は、中国において、様々なレベルの人々、あるいは集団をその支配体制に組み込むことによって、重層的な支配を実現したのである。また、最近の元朝史研究では、金一元、南宋一元明という支配者の交代にもかかわらず、社会システムは継承されていたという考え方が強くなっている。本研究でも、前政権の時代と元朝時代との間での継承性を解明すること、さらに、元朝における内陸アジア諸民族への対応、あるいは中国内地に住んだ彼らへの政策を解明することも目標とした。

(2) 本研究の代表者や分担者は、これまで、史料調査を積み重ね、その成果を史料目録やニューズレターという形で公開し、内外の多くの研究者に寄与してきた。本研究では、これまで研究を進めてきた元朝史料学の成果が、どこまで当時の中国社会の解明に有効であるかを試み、その結果を踏まえて元朝史料学の新たな展開を目指した。

## 3. 研究の方法

(1) 研究代表者は研究を総括し、研究連絡会議を主宰して、研究分担者の研究推進を図り、代表者および各研究分担者・連携研究者は、新しい視点からの元朝史料学の展開をふまえて、それぞれが専門とする言語・時代・分野ごとに史料の収集・整理を継続し、それらの内容の検討・分析を進め、モンゴル帝国元朝による中国支配の解明に努めることとする。本研究のテーマである「重層性」に着目し、メンバーを、「1：モンゴル帝国支配の形成と華北社会の研究」、「2：宋・元時代の江南社会と元朝の支配の研究」、「3：モンゴル帝国の中国支配と非漢民族の研究」の三つのグループに分けた。

(2) これらの研究を進行させるにあたり、

各自、文献史料の収集・整理・研究を行なうが、元朝時代の文献の言語・内容は多岐にわたるため、その解読と分析作業については共同で当たることも必要となるので、文献史料に関する研究集会を定期的で開催し、共同で読解を行なうとともに、史料情報を共有することとし、年10回、計30回の研究集会を開催する。

(3) 本研究課題の対象である「史料」、とくに石刻については現地調査が不可欠であるため、中国においては華北を中心とし、北京市・河北省・山西省・河南省について石刻史料の調査を行なう。また、元朝の支配領域は中国だけではなく、モンゴル高原にも及んでおり、モンゴル国での調査も行なう。

(4) 今回の共同研究における成果は、個別論文による発表、様々な学会やシンポジウムでの報告、ニューズレター『13,14世紀東アジア史料通信』の刊行などで学界に寄与する。

#### 4. 研究成果

(1) 史料収集と石刻史料調査のため、研究代表者・研究分担者・連携研究者の何人かは、期間中に中国山西・河南地方に出張し、現地調査と史料収集を行ない、これによって、これまでに知られていた石刻史料の現状の確認と、読み直しを行ない、あるいは新出の史料の発見などにつながり、元朝の中国支配の新たな諸相が明らかとなった。

(2) 代表者は、年10回、3年間で、計30回の研究集会を主宰し、各人の中国調査によってもたらされた史料を紹介、会読し、その他、メンバー相互の情報交換を行ない、継続的な共同研究を行なった。また、研究集会の一環として、メンバー以外に講演を依頼した。例えば、2010年5月22日に、「The Shuofu

說郭 of Tao Zongyi 陶宗儀 and the Textual Tradition of the Shengwu qinzheng lu 聖武親征録 and the Meng-Da beilu 蒙韃備録」と題して、クリストファー・アトウッド氏（インディアナ大学教授）による講演会、10月21日には、「モンゴルの中世期（10～12世紀）岩窟葬におけるケレイト・ナイマン・契丹的要素」と題して、U. エルデネバト氏（モンゴル科学アカデミー考古研究所研究員）による講演会を開催している。

(3) 研究成果と新出史料の情報公開のため、『13,14世紀東アジア史料通信』として、3年間で7冊のニューズレターを発行した（7冊目は近く発行予定）。

(4) 本科研最終年度に当たって、2010年12月12日には、船田の所属する九州大学での九州史学会で、共催シンポジウム「モンゴル帝国の中国支配とその社会—石刻史料による成果と課題」を開催し、後の〔学会発表〕23～26にあるように、村岡・森田・松田・井黒が科研での研究成果を報告した。

(5) 以上の研究活動により、石刻史料を中心に、モンゴル帝国の中国支配の形成と華北社会の解明に関わる史料を収集、整理を行ない、十分な成果が得られた。それらを発信するため、本科研における3年間の各人の研究成果（論文・石刻史料の紹介・訳注）については、研究分担者である森田が所属する奈良大学図書館のリポジトリで、近く公開する予定であり、現在準備を進めている。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計30件）

1. 宮澤知之、唐宋変革と流通経済、仏教大

- 学歴史学部論集、査読無、第1号、2011、71-85
2. 宮澤知之、中国古代における銭貨統一の諸段階、文化遺産学研究、査読無、第4号、2011、7-18
  3. 松田孝一・牛根靖裕、エルデニ・ゾー残碑の研究、国際研究論叢、査読無、第24巻第3号、2011、131-143
  4. 村岡倫、モンゴル時代の山西平陽地区と諸王の權益—聖姑廟「阿識罕大王令旨碑」より—、龍谷大学論集、査読無、第474・475号、2010、193-214
  5. 村岡倫、山西省夏県廟前鎮楊村「忽失歹碑」について、13,14世紀東アジア史料通信、査読無、第12号、2010、1-7
  6. 渡邊久、天聖宮と二つの蒙哥聖旨碑裏碑—山西省浮山県東張郷の天聖宮遺址を訪ねて—、13,14世紀東アジア史料通信、査読無、第12号、2010、8-14
  7. 森田憲司、近着石刻関係書所収元代石刻リスト8、13,14世紀東アジア史料通信、査読無、第12号、2010、15-17
  8. 森田憲司、近着石刻関係書所収元代石刻リスト9、13,14世紀東アジア史料通信、査読無、第13号、2010、12-15
  9. 森田憲司、『北京元代史蹟図志』所収の新資料について、13,14世紀東アジア史料通信、査読無、第14号、2010、11-17
  10. 松田孝一、窩闊台汗の「丙申年分撥」再考(1)—「答里真官人位」の寧海州分地について—、西域歴史語言研究集刊、査読有、第4輯、2010、115-134
  11. 櫻井智美、元大都の東岳廟建設と祭祀(中文)、元史論叢、査読有、第13輯、2010、20-30
  12. 渡辺健哉、元大都の宮殿建設(中文)、元史論叢、査読有、第13輯、2010、13-19
  13. 渡辺健哉、内藤湖南によるモンゴル時代に関する史料の蒐集、中国—社会と文化—、査読有、第25号、2010、211-229
  14. 渡辺健哉、元大都における中央官庁の建設について、九州大学東洋史論集、査読有、第37号、2010、49-71
  15. 井黒忍・船田善之・飯山知保・小林隆道、河東訪碑行報告、東洋史論集、査読無、第38号、2010、1-37
  16. 船田善之、元代開読詔旨考—基于黒城文書の探討—、中国多文字時代の歴史文献研究、査読無、2010、309-316
  17. 松田孝一、オゴデイ・カンの「丙申年分撥」再考(2)—分撥記事考証—、立命館文学、査読有、第619、2010、51-66
  18. 松田孝一、『事林広記』「皇元朝儀之図」解説補遺、13,14世紀東アジア史料通信、査読無、第9号、2009、1-8
  19. 森田憲司、近着石刻関係書所収元代石刻リスト6、13,14世紀東アジア史料通信、

- 査読無、第9号、2009、19-21
20. 櫻井智美、元代カルルクの仕官と科挙(ア)—慶元路を中心に—、明大アジア史論集、査読無、第13号、2009、173-187
  21. 船田善之、日本宛外交文書からみた大モンゴル国の文書形式の展開—冒頭定型句の過渡期的表現を中心に—、史淵、査読無、第146号、2009、1-23
  22. 井黒忍、区田法実施に見る金・モンゴル時代の農業政策の一断面、東洋史研究、査読有、第67巻第4号、2009、1-35
  23. 森田憲司、近着石刻関係書所収元代石刻リスト7、13,14世紀東アジア史料通信、査読無、第11号、2009、7-19
  24. 船田善之、蒙元時期硬訳公牘文体的格式化(宮海峰・中文訳)、元史論叢、査読有、第11号、2009、354-368
  25. 船田善之、元代漢文公文書(文書原件)の現状及其研究文献(彭向前・中文訳)、西夏学、査読有、第4号、2009、84-89
  26. 渡辺健哉、元代科挙的『策問』与『対策』(中文)、考試研究、査読有、第5巻第2期、2009、100-114
  27. 堤一昭、中国の自画像と日本の中国像：歴史の変遷の画期を求めて、現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境第三回国際シンポジウム論文集、査読無、2009、31-39
  28. 渡邊久、靖康の変前後の折彦質、龍谷大学論集、査読無、第472号、2008、122-188
  29. 松川節、『勅賜興元閣碑』モンゴル文面訳注、内陸アジア言語の研究、査読有、第23号、2008、35-54
  30. 宮澤知之、五代十国時代の通貨状況、鷹陵史学、査読無、第34号、2008、1-35

[学会発表] (計28件)

1. 松川節、モンゴルの文化遺産に関わる二国間協力の成果と課題、第4回モンゴル・日本文化フォーラム、2010年3月2日、モンゴル国ウランバートル市
2. 船田善之、古本《老乞大》与蒙文直訳体、“《老乞大》、《朴通事》の語言”国際学術研討会、2010年6月12日、中国浙江省桐廬県・富春江国際会務酒店
3. 井黒忍、山西翼城喬沢廟金元水利碑考—以《大朝断定使水日時記》为中心—、首届中国水利社会史国際研討会、2010年8月11日、中国山西省臨汾市
4. 森田憲司、中国近世石刻研究の課題—その材料と方法をめぐって—、九州大学史学会・本科研シンポジウム、2010年12月12日、九州大学
5. 松田孝一、「答里真官人(ダーリタイ・オッチギン)位」の寧海州分地について、九州大学史学会・本科研シンポジウム、2010年12月12日、九州大学

6. 井黒忍、水利碑から見た分地支配と社会—山西ジョチ家投下領の事例をもとに一、九州大学史学会・本科研シンポジウム、2010年12月12日、九州大学
  7. 村岡倫、石刻史料から見た探馬赤軍の歴史、九州大学史学会・本科研シンポジウム、2010年12月12日、九州大学
  8. 宮澤知之、中国における貨幣統一の諸段階、シンポジウム「古代における東西の銭と文字瓦」、2010年12月18日、国士舘大学
  9. 宮澤知之、关于元朝財政収入の初歩検討、近代以前中国の社会与国家研討会、2010年12月26日、台湾国立政治大学
  10. 井黒忍、区田法とエチナ緑城南方の蜂の巣状土地パターンについて、第15回砂漠誌分科会、2009年2月21日、奈良女子大学
  11. 村岡倫、蒙古帝国時代漢地的諸王権益、東亜史及其史料研究：中日高校第四次学術交流会、2009年3月14日、中国・南京大学
  12. 森田憲司、“地方志所収宋元遺文調査”から“可見拓影目録”まで—日本における元朝石刻史料環境—、東亜史及其史料研究：中日高校第四次学術交流会、2009年3月14日、中国・南京大学
  13. 船田善之、答阿里台系諸王令旨—兼談元代寧海地区全真道—、東亜史及其史料研究：中日高校第四次学術交流会、2009年3月14日、中国・南京大学
  14. 船田善之、モンゴル諸王・道士・地方官—モンゴル時代寧海州の石刻史料の分析を通じて—、第58回東北中国学会大会、2009年5月30日、東北大学
  15. 櫻井智美、元大都の東岳廟建設と祭祀、紀年元大都国際学術研討会、2009年7月29日、中国北京市・蟹島緑色生態度假村
  16. 渡辺健哉、元大都の宮殿建設、紀年元大都国際学術研討会、2009年7月29日、中国北京市・蟹島緑色生態度假村
  17. 井黒忍、外交文書から見た12-13世紀東アジアの国際関係—金宋関係を中心に—、シンポジウム「外交文書から見た東アジア海域世界」、2009年9月25日、大阪市立大学
  18. 村岡倫、日本モンゴル共同調査ビジュアル・プロジェクトの15年—モンゴル時代の碑文研究・遺跡調査の一端—、内陸アジア史学会2009年度大会、2009年11月21日、関西大学
  19. 井黒忍、中国山西省東南部における祈雨祭祀の諸形態—天水農業地域の水認識と水神信仰に関する歴史的考察—、関西大学文化交渉学教育研究拠点・第2回次世代国際学術フォーラム、2009年12月12日、関西大学
  20. 渡辺健哉、元の大都における祭祀施設について、第57回東北中国学会大会、2008年5月25日、北海道小樽市朝里グラーセホテル
  21. 櫻井智美、元代慶元の科挙と哈刺魯士人、慶賀蔡美彪先生八十華誕「元代民族与文化」国際学術研討会、2008年7月26日、中国甘肅省蘭州市・友誼賓館
  22. 船田善之、蒙元時期硬訳公牘文体的程式化、慶賀蔡美彪先生八十華誕「元代民族与文化」国際学術研討会、2008年7月26日、中国甘肅省蘭州市・友誼賓館
  23. 宮澤知之、宋代財政性物流和貨幣經濟、近代以前中国の社会与国家研討会、2008年8月29日、台湾国立政治大学
  24. 渡辺健哉、元代の科挙における「策問」と「対策」について、2008年度東北史学会大会、2008年10月5日、秋田大学
  25. 松田孝一、元朝期的分封制度—关于邠王出伯与邠州—、遼夏金元歴史文献国際学術研討会、2008年11月3日、中国北京市・中央民族大学
  26. 松川節、Mongolian Manuscripts from Khara-Khoto、遼夏金元歴史文献国際学術研討会、2008年11月3日、中国北京市・中央民族大学
  27. 井黒忍、蒙元時代区田法資料の文献学研究、遼夏金元歴史文献国際学術研討会、2008年11月3日、中国北京市・中央民族大学
  28. 村岡倫、モンケ・カアンの後裔たちとカラコルム—エルデニ・ゾー碑文研究の一端—、日本モンゴル学会2008年度秋季大会、2008年11月25日、神戸大学
- 〔図書〕(計5件)
1. 井黒忍、他、社会科学文献出版社(中国)、中国多文字時代の歴史文献研究、2010、総頁456
  2. 井黒忍、渡辺健哉、他、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、遼夏金元歴史研究の現在3、2010、総頁180
  3. 村岡倫、他、北海道大学出版会、北東アジアの歴史と文化、2010年、総頁582(担当分393-411)
  4. 船田善之、景仁文化社(韓国)、モンゴルの高麗・日本侵攻と韓日関係、2009、総頁325(担当分235-239)
  5. 堤一昭、他、大阪大学出版会、歴史学のフロンティア—地域から問い直す国民国家史観—、2008、総頁265(担当分35-58)
- 〔その他〕  
ホームページ等  
研究代表者・研究分担者・連携研究者の研究

研究成果は、奈良大学図書館リポジトリにおいて Web 上で公開する予定である。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村岡 倫 (MURAOKA HITOSHI)  
龍谷大学・文学部・教授  
研究者番号：30288633

### (2) 研究分担者

渡邊 久 (WATANABE HISASHI)  
龍谷大学・文学部・准教授  
研究者番号：70319507

森田 憲司 (MORITA KENJI)  
奈良大学・文学部・准教授  
研究者番号：20131609

松川 節 (MATSUKAWA TAKASHI)  
大谷大学・文学部・教授  
研究者番号：60321064

桂華 淳祥 (KEIKA ATSUYOSHI)  
大谷大学・文学部・教授  
研究者番号：40148359

船田 善之 (FUNADA YOSHIYUKI)  
九州大学・人文科学研究科(研究院)・講師  
研究者番号：50404041

渡辺 健哉 (WATANABE KENYA)  
東北大学・文学研究科・専門研究員  
研究者番号：60419984

井黒 忍 (IGURO SHINOBU)  
早稲田大学・付置研究所・助教  
研究者番号：20387971

### (3) 連携研究者

松田 孝一 (MATSUDA KOITCHI)  
大阪国際大学・ビジネス学部・教授  
研究者番号：70142304

宮澤 知之 (MIYAZAWA TOMOYUKI)  
仏教大学・歴史学部・教授  
研究者番号：70166164

堤 一昭 (TSUTSUMUI KAZUAKI)  
大阪大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：70283835

櫻井 智美 (SAKURAI SATOMI)  
明治大学・文学部・准教授  
研究者番号：40386412